

## あるアメリカ文学研究者の出発

### ― 遠い日の房総と私

風呂本惇子

この講座では、これまで三人の先生方がそれぞれ素晴らしいお話をしてくださいましたが、今日は最後に番外編としてアメリカ文学の話させていただくことになりました。三分の一ほどの時間は、六十年余り前の私の思い出にお付き合い願うことになるかと存じます。

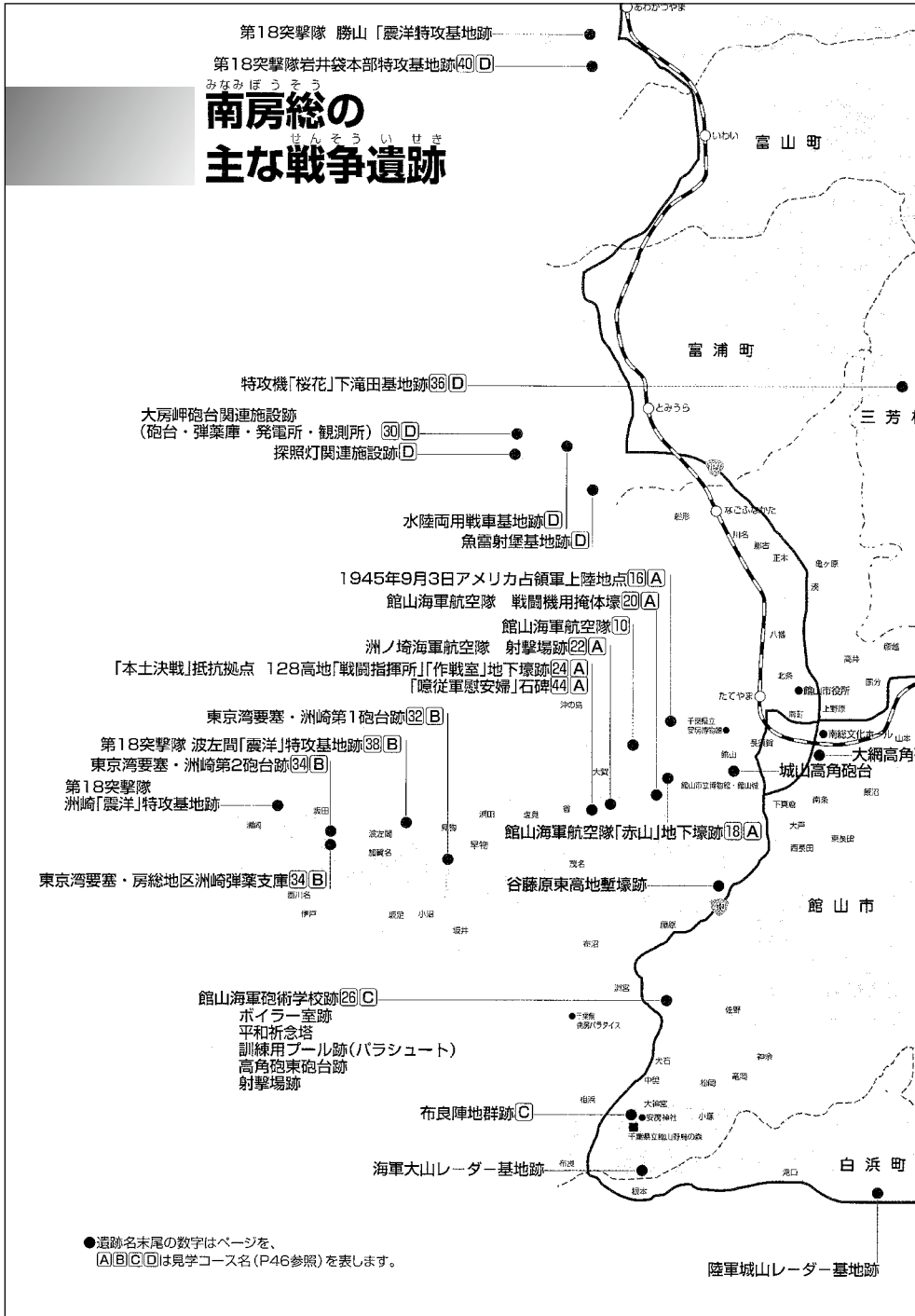
私は昭和十八年、一九四三年の二月に父親を亡くし、その年の夏ごろ、母と姉と三人で、東京から館山に移ってまいりました。第二次大戦中のことです。いざれ戦争が激しくなり、東京が狙われるだろうから、幼い子供を抱えた若い母親は今のうちに東京を離れたほうがよいという親せきたちの配慮に従って、「花がいつばい咲く魚の美しい海辺の町」と聞かされた館山の伯母の家に行ってきました。到着した日に、初めて海を見ました。その大きさ、海鳴りの音、際限もなく寄せてくる波が怖くて、泣き叫んだのを覚えています。

私は昭和十四年生まれですから、そのとき満四歳でした。今日、用意したプリント一頁の一番は、館山近辺の地図です。矢印を付けてあるところが、私の住んでいた伯母の家のある八幡やわたというところですよ。すぐ近くには、今もお祭りが有名な八幡神社があります。私たちは八幡はちまさまと呼んでおりました。さきほど紹介のときに三木先生が言及された、館山

を舞台にした映画『赤い鯨と白い蛇』は、その八幡さまのお祭りの場面で終わっています。

地図をご覧のとおり、すぐ背後に海があります。館山が実際にはどのような意味を持つ場所だったのか、子供時代には認識しておりませんでした。大人になって振り返ってみると、実に大変な地域だったので。東京湾は三浦半島と房総半島に囲まれておりますので、東京への進撃が海から行われる場合を想定すれば、房総半島の先端にある館山はまさに最前線の要塞であることが期待されて当然です。ものの本によりますと、大正十五年にすでに東京湾要塞地帯の指定地域になっております。館山海軍航空隊が開設されて、軍専用港が作られたのは昭和五年だそうです。その場所は昭和二十八年以来、現在まで海上自衛隊のおかれているところです。一番の地図で、○印がしてある沖ノ島の辺り。ここが現在も海上自衛隊のあるところですよ。

昭和十六年には、その近くに海軍砲術学校が開校して、演習場が置かれました。昭和十八年六月、ちょうど私たち母子が館山に住み始めたころですが、少し南に下ったところに洲崎海軍航空隊も開設されています。昭和十九年十一月には、皆さんよくご存じの神風特攻隊の第一陣が、館山海軍航空隊から出撃しています。神風は飛行機ですが、館山に置かれていた主力兵器は特殊潜水艇という、魚雷や爆薬を積んで敵の軍艦を狙う、二名から五名が乗れる小型潜水艦で、「海龍」とか、「震洋」とか名付けられておりました。一人乗りの「回天」のような自殺兵器ではありませんが、実際には魚雷を発射して戻ってくる余裕がないので、積み込んだ爆薬とともに敵艦に体当たりするのが、暗黙の了解になっていたそうです。先ほど三木先生がおっしゃった香川京子さん主演の映画は、



挿図1 南房総の主な戦争遺跡  
『あわ・がいで』1 (NPO法人 南房総文化財・戦跡保存活動フォーラム、  
2004年)より

まさにこの館山と洲崎を舞台にしたもので、私はこの映画から、この特殊潜水艇の演習を秘密にするために、小型潜水艦を「赤い鯨」と呼んでいたということを知りました。さらに昭和二十年四月には、私たちの家からほんの少し北にある那古というところ、これも○印がしてありますが、そこに東京湾要塞司令部が設置されたそうです。

次にプリント一頁の二番の地図をご覧いただきたいのです。戦争末期には、館山は本土決戦の最重要地域と見なされ、米軍を迎え撃つ体制を整えるためにこの地図に記されているような作戦計画が立てられ、七万人近い軍隊が配備されていたということです。館山は第二の沖繩になる可能性もあった、非常に危険な場所だったので。こうしたことが具体的に分かりましたのは『南房総文化財戦跡保存活用フォーラム』というガイドブックのおかげです。このNPOは十人集まれば、戦争遺跡を案内するツアーも組んでくださるようですが、戦争遺跡がどれほど多いかということは、プリント一頁の三番の地図（右頁、挿図1）でお分かりいただけると思います。戦争遺跡がすべて●印で記されており、個人で行くと限界があつて、これらの一部分しか見ることはできませんが、赤山地下壕とか、飛行機を隠して置く場所である戦闘機用掩体壕などは、個人でもアプローチがしやすいものです。地下壕は館山の中で他にもありまして、例の映画『赤い鯨と白い蛇』には、別の地域の地下壕が画面に出てまいります。私が見た赤山地下壕は、圧倒されんばかりの規模の大きさで、その中に兵隊の宿舎や炊事室だけでなく、作戦司令室とか、病院とか、無線室とか、その他すべてがあつたようです。これを掘らされた人々の労力は大変なものだったろうと思います。こんなものが存在していた事実も民間人は知らずに、と言いますか、これも長らく

秘密にされてきたわけです。

ここから少し個人的な回想に入ります。昭和二十年に入ると、空襲はほとんど毎日のようにありました。基地だけでなく、周辺の民間施設や列車も爆破や機銃掃射の的になり、私の身内にも負傷者が出ました。四月になって当時は国民学校と言っていた小学校に入学しても、登校するとすぐに警戒警報が出て、走って家に帰り、空襲警報とともに庭の片隅の防空壕に飛び込むという状態で、ろくに勉強もできませんでした。お若い方のために説明しておきますが、警戒警報と空襲警報と二段階に分かれていて、警戒警報のときに防空壕に飛び込む用意をして待ち、その後空襲警報のサイレンが鳴れば防空壕に飛び込むし、警戒警報だけで解除になる場合もありました。余談ですが、私の夫は京都府の加茂という、京都府と奈良県の境目の辺りの出身ですが、そこが都会でなかったことと、京都や奈良が空襲を免れていたことのおかげでしょうか。その辺の子供たちは爆音がすると、これは大阪や神戸を爆撃するための敵機なんですけれど、庭に出て空を見上げ、B二九の形を識別したと言います。先日、三木先生も子供のころ長野にいらして、やはり空を見上げて飛行機の形を見ていたとおっしゃいました。私たち館山の子供はそんな余裕はなかったです。爆音は直ちに地下へ潜れという合図でした。同じ国の中でも、同じ年ごろの子供であつても、恐怖の温度差というのがあつたんですね。

私にとつて戦時中の恐怖の最も大きかった体験、死というものを子供心に感じた体験は二つあります。一つは昭和二十年五月に、地図で○印を付けた那古の近くに爆弾が落ちたときです。たくさん死傷者が出ました。本当に形容しがたい、すさまじい音がしまして、これは今でも忘

られませんが。八幡の私どもの家のすぐ裏手に、某鉄工所がありましたので、それを狙ったのが少しそれで那古へ落ちたんだろうと、そのとき大人たちは言っておりました。しかし今になってみれば、その前月の四月に那古に東京湾要塞司令部が設置されたのですから、初めからその辺りを狙って落としたものだったのかとも思われます。

もう一つは、それから二カ月ぐらいい後、夏休みに入った頃のことだったと思いますが、私たちは館山から再疎開して埼玉県の奥地へ行くことになりました。その途中で、一日か二日、東京の池袋に滞在したことがあります。私は池袋の生まれで、親戚もその辺にかたまっておりました。十万人が亡くなったという、あの三月十日の大空襲で、その当時まだ池袋に残っていた親戚の一家が焼け出され、掘っ立て小屋で雨露をしのいでおりましたが、そこを訪れていたときのことです。その周辺はまさに一面焼け野原で、所々にがれきの山がある状態でした。年の近いところ二人と、姉と、私と、子供ばかり四人で歩いていると、突如頭上に超低空飛行でアメリカの飛行機が現れたのです。一機だけでしたから、今思えばそれは偵察機だったのでしょうか。隠れる場所はまったくなく、上からは丸見えの焼け野原を、せめてがれきの陰に身を伏せようとして走っていったあのときの恐怖。六十年たった今も、やはり忘れられません。子供四人を射撃してもしようがないと思っただけで済んだのでしよう。皆ぶじでした。そのいとこたちも姉も健在ですが、何かの折にふと漏らす言葉の端々に、彼らもあの恐怖を今もって忘れていないということを感じさせられます。二〇〇一年にニューヨークにテロがあって、アフガニスタンに報復が加えられていたころ、テレビでがれきの野原に化したアフガニスタンの映像をよく見ましたが、あれとそっくりでした。

しかし、私の恐怖などは、もちろん広島、長崎、沖縄の方々の体験されたものとは比較にもならないだろうと思います。

航空隊の兵隊さんに関する忘れられない思い出も二つあります。海軍の制服であるセーラー服を着た兵士たちが、訓練のためにしばしば航空隊基地から那古まで行進させられていました。非常に長い距離で、私の住んでいた八幡の家の真ん前を通って行くのですが、帰りは駆け足でこの距離を戻っていかなくてはいけないのです。行進のある日は、ザックザックという足音が聞こえてくると、民間人は沿道に並んで、ご苦労さまという思いを込めて見送る習慣がありました。彼らが駆け足で戻ってくる時も、同じように家の外へ出て行って見送るのです。

でも何しろ大変長い距離の行進ですから、帰りはみんなかなり疲労していたようです。あるとき、疲労のあまり一人で立っていることができて、仲間の肩につかまってよろよろ走っていた若い水兵さんがおりました。所々に上官たちが立って監視しているのですが、これを見付けた上官たちがちやうど私の家の前で、この水兵を厳しく叱りつけ、仲間から引きはがすようにして、殴ったり蹴ったりし始めたのです。それはもう、大変な剣幕でした。見ていた私は恐ろしいのと、その水兵さんがかわいそうなので、思わず泣き声を上げてしまいました。そのとき周囲の大人の誰かの手、誰だかは覚えてないんですが、親せきの者か、近所の人か、大きな手が私の口を押さえたのです。成長してから、私はこの出来事を少し大げさかもしれませんが、象徴的にとらえるようになりました。軍隊という名前で正当化された暴力に、本能的に異議を唱えたかった私の声が抑圧され、沈黙を強いられたのではないかと。そんなふうに感じました。

私が泣いたせいではないと思いますが、その後しばらくして兵隊さんの訓練行進のときは、民間人は家の外に出てこないでくれというお触れが隣組を通して回ってきました。行進の時間もかなり早朝に変えられたようです。ザックザックという足音が遠くに聞こえると、私たちは戸を閉めて、家の中でじっとして、それが通り過ぎるのを待つようになりました。外で怒号が飛び交っていても、耳をふさいでいたのです。

もう一つ思い出があります。ある日、特殊潜水艇で出撃することになった兵隊さんが、出撃前にご家族と最後の面会をして、数時間を一緒に過ごせるように、座敷を貸してもらえないかという依頼が、隣組の組長を通して周辺のいくつかの民家にまいました。うちも選ばれた民家の一つでした。伯母の家の庭に面した一番広い座敷は、私たち母子三人が借りていたのですが、伯母と母はここをきれいに掃き清めて、なければの食料からそれなりの食事を用意して、特攻隊員とそのご家族を迎えました。埼玉県からおいでになったそのご両親も、息子さんに食べさせたいと食料を用意して来られました。行進中に上官に殴られていたあの方も、うちの座敷でご両親と話していたあの方も、あれからまもなく戦死なさったのだらうと思います。

そのときのご縁で、姉と私は埼玉県の奥地に再疎開することになりました。艦砲射撃のうわさがあつたからです。艦砲射撃は軍艦から発射されますので、海辺の住民が巻き込まれる危険性が非常に高かったのです。それで館山については危ないので、子供だけでも避難させようという話になったとき、行く当てのない私たちを見かねてこの特攻隊員のご両親が埼玉県の親類に頼んでくださったのです。行ってみますと、そこはまた大変のんびりしたところで、たまに警戒警報が鳴っても誰も慌てな

いし、第一、防空壕がないのです。姉と私は館山つ子の習性で、警報が鳴ると庭にいるのが怖くて、縁の下に潜ったりしましたが、ほかの子供たちに笑われてしまったのを覚えております。

でもともかく私たちは生き延びて、終戦の日を迎えることができました。ちょうどその前日に姉と私はまた館山に戻ってきておりました。天皇のラジオ放送を聞いた後、うちの縁側に集まっていた、伯母や、母や、近所のおばさんたちが、目頭をぬぐいながらも、妙にほっとしたような静かな表情だったことが印象に残っています。もうたいのいの人がこのことを予測していて、来るものが来た、と受け止めていたのではないかと思います。

プリント二頁をご覧ください。アメリカ軍の上陸の写真です。八月三十一日に先遣隊が館山に上陸し、九月三日に三五〇〇名のアメリカ兵士が上陸しました。彼らが航空隊の基地の方向から、ジープやトラックに分乗して、うちの前を通って那古のほうへ進んでいくとき、私たちはやはり隣組を通してのお触れに従って、雨戸を閉め、家の中にじっと潜んでおりました。木の雨戸には所々に小さな節穴があります。大人も子供も、その節穴からうちの前を通る隊列をのぞいていました。その辺りの地域一帯、しーんと静まりかえって全く物音がせず、聞こえるのはジープとトラックの音だけでした。兵士たちは鉄かぶとをかぶり、銃を四方八方に向けて構えておりました。ものの本によれば、軍人や住民の反乱を警戒していたのだとあるんですけれど、私の周囲の大人たちは心身ともにへとへとなっていて、とても反乱を起こす気力など残っていません。

その後も何日間か、八幡神社の鳥居のところには、常に銃を構えた兵

士が交代で立っておりまして。神社が戦時中の日本のイデオロギーと関係あると判断されたからでしょう。九月のことですから、二学期が始まっておりまして、学校帰りの私たちは鳥居のところに来ると、その兵士の前を息を潜めて緊張して通りました。小学校にも時々ジープに乗って見回りが来ました。教育を監視する示威行為だったのかもしれない。一方、校舎の中では、私たちは先生に言われるとおり、教科書に墨を塗る作業、戦争に関係ありそうなあらゆる言葉や絵を抹消する作業に余念がなかったのです。教えられてきた価値観は、あつという間に根こぎにされ、アメリカ万能の時代に突入しました。小学校一年の私にさえ、その転換は不思議なものに思えました。

小中高を終えて大学に入り、これからは自分で勉強の分野を選べるという時期が来たときに、私は迷わずアメリカを選びました。以後、アメリカの素晴らしい点を、歴史や文学からさまざま学んでまいりましたが、怖かった戦時中のアメリカのイメージがどこかに残っていて、心を許しきることができなかったのかもしれない。私の関心はむしろアメリカ社会の周辺に向かって行き、いつの間にか少数派、中でもアフリカ系アメリカ人に焦点を合わせるようになりました。

今日はアメリカ文学のお話ですので、ここからは実際のアメリカ文学を採り上げてお話ししたいと思います。プリント三頁、五番の写真（左頁挿図2）をご覧ください。このハンサムな青年は、ノーマン・メイラーです。一九二三年生まれ。第二次大戦を舞台にした小説『裸者と死者』（*The Naked and the Dead*, 1948）によって一躍世界的な名声を獲得した作家です。この名作が出版されたとき、彼は二十五歳の若さでした。出版されるや、たちまちベストセラーになり、共産圏を含む全世界にさまざま

じい反響を巻き起こしたというようなことがプリント三頁六番の年賦に書いてあります。その後、『鹿の園』『白い黒人』『ぼく自身のための広告』『アメリカの夢』等々、話題作を次々出し、ケネディ大統領を応援したり、反戦活動を続け、一九六九年には自らニューヨーク市長選挙に立候補したり、フェミニストのケイト・ミレットと大論争をしたり、さまざまな話題を振りまいて、現在八十四歳、なお意気軒昂で、この一月にも新刊『森の中の城』（*The Castle in the Forest*）を出版しております。

その年譜に書いてありますように、この人は館山に上陸した例の三五〇〇名のうちの一人だったのです。ハンサムボーイの写真はそのころのものと思われれます。ここに彼が館山に上陸したときの印象を綴った文章があります。日本におけるメイラーの翻訳者として著名な山西英一さんのお書きになったものから抜粋して、読ませていただきます。これはプリントにはしておりません。

「ジープで町に入っていくと、人々は叫び声を上げて隠れてしまつて、人っ子一人いなくなつた。それでも僕は人影を一つ見た。それは三つぐらいの子供が道の真ん中に突っ立っているのだつた。僕たちが近づいていくと、母親らしい女が飛び出してきて、その子を抱きかかえて姿を消した。僕はそのときの母親の顔に刻まれた恐怖と同時に、勇氣に満ちた表情を忘れることができない。」

人々が隠れてしまつて人っ子一人いない町の様子は、まさに私自身の記憶に合致します。私が雨戸の節穴からのぞいていたときに、銃を構えてジープで通過していったあの人たちの中に、若き日のメイラーがいた



挿図2 『ノーマン・メイラー全集2』  
(新潮社、1969年)より

かもしれない、それにひよっとしたら、彼も八幡神社の境内で銃を構えて、学校帰りの私たちを見ていたかもしれない、と思うと感慨無量です。メイラーは三十日間館山に駐屯し、その後銚子に移り、数カ月たつて福島県小名浜（現在のいわき市）に駐屯し、一九四六年五月に除隊になって帰国するまで合計九カ月、敗戦直後の日本におりました。銚子の風景描写は、短編小説の『The Paper House』というのに出てきます。これは芸者とアメリカ兵士の関係を書いたもので、乱暴者のアメリカ兵士に対する芸者の復しゅうぶりが書かれていて、面白い小説です。また小名浜では、彼は炊事兵だったので、日本人の炊事係とのやりとりが、小名浜を舞台にした『The Language of Men』という短編にちよつとだけ出てきます。

しかし長編『裸者と死者』を書く上に、九カ月の日本滞在がどれほど深い影響を与えたかは、山西英一さんへの私信に明らかにされています。少し長いのですが、プリント四頁の七番に引用してまいりましたので、読んでみます。

「僕が日本をどんなに愛しているか。今まで何度もあなたに書いてきたことだから、今更改めて言う必要はないでしょうが、日本はかつて僕が見た最も美しい

国として、今も僕の記憶のうちに生きています。日本で過ごしたこの九カ月の経験は、また『裸者と死者』に対して、最も重大な影響を与えたと思っています。フィリピン作戦当時、僕はまだ年がひどく若くて、二一か二二に過ぎませんでした。そしてあのころは、日本人が下劣な黄色人だとか、残忍な人殺しだとか、冷酷な拷問者だとか、鬼畜だとかいう、戦時の宣伝をある程度信じ込まされてしまいました……どんな宣伝が行われていたか、詳しく述べる必要はありません。終戦後、日本に行き、個々の日本人から直接少しづつ知ったことから、われわれすべてのものと同様に、すべての人間、すべての社会と同様に、日本人もまた自分で罪を犯すよりも、むしろ罪悪の犠牲にされているのだということが徐々に分かってくるにつれて、僕はあの宣伝が恐るべき欺まんであり、完全なベテンであったことを初めて痛烈に理解したのでした。『裸者と死者』の構想は、僕の日本滞在中に生まれたのです。僕の激しいラジカルな氣質は、この日本滞在の九カ月によって初めて生み出されたものではなかったとしても、少なくともこれによって決定的に進められたことは事実です。」

これは個人的な手紙から訳されて、山西さんが翻訳のあとがきに収めておられます。「鬼畜」という言葉は戦時中の日本でもアメリカに対して使われておりましたね。両国が同じ宣伝をしていたわけです。では、ここでごく簡単ですが、『裸者と死者』の内容を紹介してみたいと思います。メイラーはレイテ島、ルソン島に行っておりましたから、その経験を基にして、作品の舞台を南太平洋のアノボペイ島という無人島に設定

し、日本軍との激しい戦闘を生々しく描いています。うっそうと茂るジャングルの中で、はじめとよく降る雨や、蒸し風呂のような暑さ、虫さされや下痢に悩まされ、背囊の重さに耐えて、四六時中日本軍の大砲の音におびえ、極度の緊張にさらされる兵士たち一人一人の心の中が丹念に描かれていきます。背囊というのは、毛布、食料品、薬などいろいろなものが入っていて非常に重いのだそうですが、これを各兵士が背中に背負わなければならないのです。登場人物の一人がいみじくも口走るように、「この無人島を日本軍が欲しがるならやつちまったって、おれはちつともかまやしない」というのが彼らの本音でしょう。では彼らがどうして動くかといえは、戦争の大義名分ではなくて、上官への恐怖と、早く任務を終えて安全なところに戻りたいというその本能からです。にもかかわらず、上官におもねて軍の階級を一つ上りたいというような欲望は消えないし、また本国にいるときは教育の不足で覚えてきた劣等感を、軍隊内の人種差別による優越感で埋め合わせしようとする意識なども働き、こんな極限状態に置かれながらも、兵士同士が互いを信頼しきれないでいるためにあつれきが生じます。上官の側も、分隊の指揮権を握りたいという競争心や、自分の誇りを傷つけられそうになったために部下を許そうとせず、わざと危険な任務に就かせる復讐心など、個人的な欲望をむき出しにします。メイラーのペンは、將軍から一兵卒に至るまで平等に、うわべを引きはがして、赤裸々に裸にしていきます。だから戦場にいるのは裸者と死者だけなのです。

もう少し具体的に紹介してみます。絶対的権力者であるカミングス將軍は、副官にしたハーン少尉の、戦争や軍の在り方などに疑問を持って、いるらしい知的な表情に腹を立て、彼を危険な偵察隊に追いやりま

カミングス將軍は実戦の危険とはほど遠い後方の清潔なテントの中で、机上の作戦をもてあそぶ存在として描かれています。また、上官への恐怖こそが有能な軍隊を作るのだ、と臆面もなく口にする人物です。一方、これまで偵察隊を率いていたクロフト軍曹は、自分の上に指導者としてハーン少尉が配属されたことに腹を立て、ハーンを策略にかけて、日本軍の銃弾の的にさせて死なせてしまいます。クロフトは引き返したが部下たちを叱咤し、アナカ山という高い山に登ることを強制します。その途中で、体が弱く疲労の極みにあつた兵士ロスは、絶壁を飛び越えることができずに墜落死してしまいます。残りの部下たちは抵抗しようと試みるのですが、クロフトが銃を向けて脅すと、彼らの結託力はすぐに鈍ってしまつて、結局屈服してしまいます。

皆さんはハーマン・メルヴィルの『白鯨』(Moby Dick, 1851)を存じと思えます。エイハブ船長が異常に強い執念に燃えて水夫たちを駆り立て、巨大な白い鯨を追い求め、ついにただ一人を除く全員を海の藻くずにしてしまい、そのただ一人残ったイシユメールが事のてん末を語るといふ形の小説です。ノーマン・メイラー本人が、この『白鯨』を意識して『裸者と死者』を書いたと言っています。自分のこだわりのために無謀な山越えに部下を駆り立て、彼らの命を危険にさらす点で、クロフトは確かにエイハブ船長に似ています。ただし、この山越えの結末は『白鯨』のような壮大なものではありません。クロフトがたまたま熊蜂の巣に触れてしまい、熊蜂の襲撃で総崩れになった一隊が、背囊も銃も投げ出し、一目散に逃げて山を駆け下り、苦勞して上つてきた距離をあっという間に元のところまで戻ってしまうという皮肉なものです。そして彼らの苦闘とは全く無関係に、しかも絶対的権力者であつたカミン



グス将軍が援軍を頼みに行つて島を離れている間に、全くの偶然が重なつて、日本軍が壊滅状態になつてしまつていたという落ち込みでありません。

この後、兵士たちは、日本軍のわずかな敗残兵をまるでスポーツ感覚で探し出しては殺すのです。日本軍とアメリカ軍の戦死者の比率は、総数は出ておりませんが、例えば敗残兵を始末する掃射戦の第六日目には三三七名対一名、第九日目には五〇二名対四名というように圧倒的なアメリカの優位が示されます。こうした敗残兵の殺され方に、人間を狂気に導く戦場という作者の認識が現れています。敵味方を問わず、かくも無意味な多数の死を示すことによつて、これが本場にファシズムと民主主義の戦いだったのだろうかという、痛烈な問いかけが感じられます。

しかし彼が日本滞在中に受けた影響というのが、もつと明白な形で表れている例をご紹介したいと思います。戦死した多数の無名の日本兵たちの中で、作品で唯一名前の出てくる日本人青年将校にイシマルという人物がいます。(イシマルは『白鯨』のイシユメイルから連想した名前かもしれません。)生きていたときの姿は登場せず、彼の残した日記がアメリカ兵に拾われる設定です。プリント四頁の八番は、その日記の中の詩です。それを日系二世の通訳担当少尉ワカラが英訳し、それをまた山西さんが日本語にした形です。

真ん中辺に、「かつて銚子に祖父母と過ごせし日よ」とありますので、イシマルがかつて祖父母たちと銚子にいたことがわかります。二世のワカラも銚子にいたことがあるという設定で、ワカラの目を通した銚子の印象が引用の九番に書かれています。先ほど言いましたようにメイラーは館山のあと銚子に駐屯しております。さて、イシマル少佐の詩の最後

のところ、「われはまさに死なんとす。われは生まれ、われは死す。われは自問す。なぜか。われは生まれ、われは死なんとす。なぜか、なぜか、それは何を意味するや。」と、率直な心情が表されています。このイシマルの日記に関して、翻訳者の山西さんが実際にそのようなものを戦場で拾つたのかと、メイラーに尋ねたことがあるそうです。すべてはフィクションだという答えと共に、イシマルの創造につながる一つのエピソードを書いてよこしたということです。これもすべて山西さんへの私信です。

福島県の小名浜に駐屯していたときに、少し英語の話せる日本人青年が訪れてきて、メイラーは二時間ほどしゃべつたことがあるそうです。その青年は、人間魚雷に乗り込む訓練を受け、あと一週間で出撃と決まっていたときに突然終戦になり、自分は生きていくのだと知つたときの衝撃をメイラーに語りたかつたらしいのです。彼が、「なぜ僕は死のうとしていたのか、僕の死に果たして意味があったのだろうか」ということを言い続けていたと、メイラーは言っております。そのところがイシマルの日記の中の詩の最後の部分に反映しているわけです。メイラーはこんなことも言っております。「もし僕があつた士官候補生に会わなかつたら、あの本はもつと価値の少ないものになつたらうと思う。なぜなら彼との会話は、戦時中日本人を鬼畜と見なすように組織的に教え込まれていた宣伝の、鈍い最後の層をみじんに打ち砕いてしまつたからです……当時僕の頭の中できかけていた『裸者と死者』は、一つの国民をもう一つの国民より優れたものとして見ようとする宣伝なり、願望なりの痕跡をすっかり払拭してしまつたと思います。」

私はメイラーがイシマル少佐の日記に加えて、ワカラ少尉という日系

二世を登場させたことにも注目したいのです。メイラー自身がユダヤ系ですが、この作品に描かれている偵察隊は多民族国家アメリカを反映して、ユダヤ系、アイルランド系、イタリア系、メキシコ系などさまざまな人種や民族から成り立っています。各自の過去や祖国（祖国とはアメリカでなく、要するに元はみな移民ですから親の世代の出身国を意味しますが）に対する複雑な思いが織り込まれていますし、今はみなアメリカ人としてアメリカのために戦っているにもかかわらず、人種や民族、宗教の違いのものに対する差別的な意識とか、言葉とか、態度が、何かにつけて表に出てくるのです。その、多民族国家を象徴するような偵察隊には入っていない日系二世のワカラをあえてここに登場させて、日本に対するワカラの思い、同僚であるアメリカ兵に対するワカラの思いを独自のような形で語らせているのです。

同僚たちから「奇形人間」のように扱われるのにうんざりしていた彼が、もともと画家志望だった自分は、家族と一緒に強制収容キャンプに残っていたほうが多分よかったかもしれない、そうしたら少なくとも自分は今絵を描いていただろうにと考える場面とか、イシマルを理解するには自分があまりにもアメリカ人になり過ぎてしていると感じる場面など、日系二世の心理に対するメイラーの洞察力が表れています。

ワカラの話になった流れで、日系の作家が第二次大戦を扱った作品を少し紹介したいと思います。すでに私の話は館山からも、銚子からも離れております。ご了承ください。ワカラの独白でメイラーが触れていたように、日系アメリカ人は戦争が始まると立ち退きを強制され、全米十ヶ所に作られた収容キャンプに入れられました。一九四〇年の人口調査では、日系人は一二万七〇〇〇人ほど。うち、二世が七万九〇〇〇人

ほどいました。一九四三年二月、収容所内で十七歳以上のすべての日系人に、忠誠登録質問というのがなされます。男性に対しては二つの質問、「あなたは合衆国軍隊に入隊し、命令があればいかなる戦闘任務にも就きますか」というのと、「あなたは合衆国に無条件に忠誠を誓い、日本国天皇、またほかの国の政府権力組織に対する忠誠を拒否しますか」というのがあったのです。メイラーが描いたワカラは、イエスと答えて入隊した一人です。徴兵年齢に達した二世男性が二万一〇〇〇人いたうち、約四六〇〇人がこれにノーと答えたそうです。この人たちは「ノーボーイ」と呼ばれて、家族から引き離され、別の収容所に集められました。ほとんど刑務所のようなところに入れられたようです。一方、ルーズベルト大統領により、二世だけから成る四四二部隊というのが作られて、志願兵が集められ、特殊な訓練の後、ヨーロッパ戦線に送られました。いずれも激戦地で、ほかのアメリカ兵が行きたがらないところへ送り込まれたのが実情のようです。この部隊は、非常にたくさんの犠牲者を出し、多くの戦功、全米第一の一八〇四個の勲章を取って忠誠度を示したのです。

日系アメリカ人作家ジョン・オカダの『ノーボーイ』（一九五七）の主人公、山田一郎は二つの忠誠登録質問にノー、ノー、と答えたために、刑務所のような収容所に入れられ、戦後釈放されるのですが、四四二部隊に入った友人や弟から軽べつされて、自己嫌悪に陥ります。一郎が、なぜノーと答えたのか自分でもわからず、自己のアイデンティティーを求めて悩む過程が描かれています。一郎の母は日本の敗戦を信じようとしない頑固な一世で、ついに事実を認識したときに自殺します。こういう一世の母親と暮らしてきた一郎は、母親に反発しながらも

知らず知らずに影響を受けていて、アイデンティティーにかかわる例の質問を突きつけられたときに、とっさにイエスとは言えなかったのです。

強制収容の理不尽さを描いた日系二世の作品はほかにもいろいろありますが、アメリカのお隣のカナダにも、それを描いた作家がおりますので紹介しておきます。女性作家ジョイ・コガワの『失われた祖国』（一九八一）、原題はローマ字でOBASANと書きますが、この小説は戦時中の日系カナダ人の置かれた状況を描いています。カナダの場合は、アメリカのようにいくつかの収容所に日系の人を集めるというのではなくて、強制立ち退きをさせて、家族も分散させて、行く先をそれぞれ指定するのです。主人公である語り手のナオミは、立ち退きを体験したときまだ五歳ぐらいで、二つか三つ上の兄のスチーブンと、優しく物静かなアヤ伯母さんと三人で、指定された見も知らぬ土地へ行きます。アヤ伯母さんは父の腹違いの兄であるイツサク伯父さんの妻です。父や伯父のような成人男性は、それぞれ別のところへ連れていかれて、そこで働かされるのです。実はナオミの母は、用事があってナオミの祖母と共に日本へ一時帰国していたのですが、その間に戦争が激しくなつて、ついにカナダに帰ることができなかつたのです。

ナオミは母を待ち続けておりましたが、音さたがなく、やがて戦争が終わつて、再会した父は病気でまもなく亡くなり、昔のような豊かな生活は二度と戻らず、伯父夫婦と共に貧しさと闘いながら成長していきます。日本へ一時帰国していた母のその後の実情がわかるのは、彼女が大人になってからです。母の遺言で伏せられていたのですが、母は長崎にいて原爆に遭い、自分の母親（ナオミの祖母）にも見分けがつかぬほど

惨めなやけどを負つて、衰弱死していたのです。そうしたことが古い手紙や、古い書類から、だんだん表に出てくるという形を採っています。軍隊に入隊することで忠誠度を示すという、ある意味で分かりやすい人生の岐路とは縁遠いところにいた女の子の視点で戦争を書いた、これも優れた作品と思います。

この作品の中で、伯父さんが、かつてはインディアンという呼び方をしておりましたが、カナダ先住民に似ているという描写がしばしば出てまいります。小学生のナオミが湖でおぼれかけたときに、助けてくれた先住民の男性が登場したりして、先住民への親近感が全編に漂っております。これを糸口として、アメリカ先住民作家が第二次大戦を描いている例を次に紹介しておきたいと思います。レスリー・マーン・シルコーという女性作家で、一九四八年の生まれです。一九四八年というのはノーマン・メイラーの『裸者と死者』が出版された年です。ニューメキシコ州アルバカーキの、ラグーナ族のいるリザベーション（先住民だけが集められている保留地）で育っています。彼女の書いた作品は『悲しきインディアン』（一九七七）、原題はCrematory、儀式という意味です。

主人公のタヨというラグーナ族の青年は、第二次大戦に出征してフィリピンのジャングルで日本軍と戦い、戦争神経症にかかつて帰国します。小説の出だしは、戦争神経症がまだ治っていないタヨの混濁した意識——もうアメリカに帰っているんですけども、すぐに戦争中の記憶に戻ってしまう、その混濁した意識で書き始められています。フィリピンのジャングルで日本軍と戦うという設定はメイラーの『裸者と死者』と同じです。そしてメイラーのほうには、多民族構成の偵察隊の中に、日系もアメリカ先住民も入っていませんでした。入っていないかった

部分は、こういう他のマイノリティーの後の世代の作家が補うような形で、第二次大戦のことを書き続けているんですね。

作品の中でタヨの戦争神経症の起因となった事件が二つ書かれております。一つは日本軍の捕虜を一行に洞穴の前に並ばせ、上官から銃殺を命令されたときに、タヨが発砲できなかったこと。そこに並んでいる日本人たちが、アメリカ先住民の自分の知人たち、特に自分をかわいがってくれたジョサイア叔父さんと非常に顔が似ていたからです。タヨは先住民の母親と白人の父親をもつ混血なので、リザベーションではいろいろと冷たい扱いを受けていたのですが、ジョサイア叔父さんだけがいつもタヨをかばってくれたのです。そのジョサイア叔父さんにそっくりな人を殺せと言われたときに、彼はどうしても発砲できなかったのです。

そうすると誰か別の兵士が発砲し、ジョサイア叔父さんによく似た日本人の男性が倒れるのですが、タヨはジョサイア叔父さんが死んだのだと思っただけ泣き出します。タヨと一緒に入隊して、いつも一緒にいた兄貴分のいとこのロッキーが、「これはジャップだよ」（ジャップとは日本兵を指す蔑称）と言って、その死体を蹴って顔をよく見させようとするのですが、タヨにはジョサイア叔父さんが倒れて、自分の大好きな兄貴分のロッキーが、事もあるうにその叔父さんを足で蹴飛ばすというふうに見えてしまっていて、精神的に取捨がつかなくなるという場面があります。

もう一つは、今度は彼の分隊が捕虜になり、負傷したロッキーを毛布でくるんで捕虜収容所に運んでいく途中の場面です、土砂降りの雨です。メイラーの作品でもそうでしたが、ジャングルの中はよく雨が降ります。その雨の中で一緒に運んでいた仲間が転んで、支えていたロッキーの体が地面に落ちたときのことです。そばにいた日本兵が、タヨの

体を押しつけます。その日本兵がタヨの知人ウィリーに非常に似ていたので、思わず「ウィリー、覚えてるだろう。僕の兄さんなんだよ、これは」というふうには、ロッキーのことを説明するんです。話しかけられた日本兵はきょとんととして、不思議そうにタヨを見た後、ロッキーを、ほとんど死んでいたのだからこれ以上運んでもしょうがないという判断で、銃で殴り殺してしまいます。タヨは耐えきれずに泣き叫びます。日本兵とかかわるこの二つのできごとが、タヨの神経が狂う源になっているように書かれております。帰国しても、タヨは、病院とか西洋医学ではなくて、結局先住民のメディスンマンによるおはらいのセレモニー、まじないの砂絵を描いて行うのですが、そういうことを通してしか回復できなかったという筋です。

タヨとロッキーは入隊するときに、これで世間に一人前として受け入れられるという幻想を抱きました。これは日系とかアフリカ系とかハイフォン付きの人々の多くが抱いた幻想だと思えます。アメリカに忠誠を示して、戦争に出て行くことによって存在を認められ、差別が解消されるのではないかと思っただけです。しかし戦いが終わってみると、彼らはアメリカのメインストリームに受け入れられるどころか、元のリザベーションに戻されてしまいます。復員兵士たちは酒におぼれる日々を過ごしております。その一人にエモという非常に乱暴な人物がおります。タヨのような繊細な神経の人物と同時に、乱暴な先住民も描かれているわけです。彼はジャングルで日本の大佐を殺して、その金歯を集めてきたと自慢し、その金歯を今もことあるごとに酒を飲みながらみんなに見せびらかすというような人物です。実はメイラーの作品の、あの多国籍軍みたいな分隊の中に、メキシコ系のマルティニズという人物が

いるんですが、その人物がやはり死んだ日本兵のいっばい転がっているジャングルの中で金菌を集めるといふシーンがあるのです。彼はメキシコ系の兵士です。そしてアルバカーキは限りなくメキシコに近いところですよ。ひょっとしたらアルバカーキ出身のレスリー・マーモン・シルコーは、ノーマン・メイラーの小説を読んでこれを書いているのではないかなと、そんな感じがしてまいります。

ユダヤ系、日系、先住民作家の、第二次大戦における日本人との出会いを描いた小説をいくつか紹介してまいりました。ですから、最後に私の専門分野であるアフリカ系アメリカ人の作品で話を終えたのですが、実はアフリカ系アメリカ人が出征してジャングルで日本兵に出会うような作品と、私はまだ出会ったことがないのです。メイラーの描く多民族構成の分隊に一人もアフリカ系アメリカ人は入っておりませんでしたし、先住民シルコーの小説でもアフリカ系アメリカ人と戦場ですいしよだったとは全然書いてありません。アフリカ系アメリカ人があの戦争に協力しなかったわけではなくて、一九四四年までに三〇〇万人以上が入隊しております。そして二十万人が太平洋戦争に出かけていったそうですから、太平洋の地域に分散していたのは確かなのです。察するに、軍隊の中の差別によって、他の人々と同じ分隊に入れなかったからではないでしょうか。軍隊内での人種隔離を禁止するという行政命令第九九八一がトルーマン大統領によって出されたのは、一九四八年です。第二次大戦はすでに終わっていて、朝鮮戦争の始まり（一九五〇年）が兆した頃のことです。

従って第二次大戦に関する限り、同じところで戦っていないから、アフリカ系アメリカ人以外の作家の作品の中にも登場していないのではし

うし、アフリカ系アメリカ人自身の作品にも、前線に出て行って、他のアメリカ兵たちと一緒に戦うという体験談が、あまり書かれていないのではないかと、とそんなふうに推測いたしました。話があちこちしましたが、質問の時間をといることですので、こんなところで終わらせていただきます。

〔追記〕 本講演は二〇〇七年二月に行ったが、講演で取り上げた作家ノーマン・

メイラーは、同年十一月十日に逝去した。

（ふろもと あつこ・本学人文学部国際文化学科客員教授）

